



赤江小学校だより

ちまちだ

開校 150 周年特集号

校長 難波真章


令和6年3月10日

ひとみ輝き 笑顔と笑い声がこだまする赤江小学校

すすんで
あいさつする子
になろう

あきらめずに
がんばる子
になろう

自分もあいても
大切にする子
になろう

すすんで **あ** いさつする子
あきらめずに **か** んばる子
 **え** がおで
安心 学校生活が送れるように
自分も相手も大切にする子

明治6年5月23日に開校した赤江小学校は、開校150周年を迎えました。長きにわたって赤江小学校を支えてくださっている赤江地区の皆様にご心より感謝申し上げます。

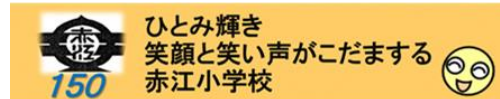
本校では、開校150年という大きな節目に、子どもたちに赤江小に対する誇りと愛着、多くの皆様への感謝の気持ちを育てていきたいと考え、児童会の実行委員会の協力と、加藤聡士実行委員長をはじめとするPTA運営委員会を母体とした開校150年記念実行委員会のお力により、2ヶ年にわたり様々な記念事業に取り組んで参りました。

10月28日(土)の記念花火大会には、大変多くの方にお出かけいただきました。子どもたちは、夜空に広がる350発の花火を見て赤江小学校に対する思いを深めてくれたことと思います。開校150年を迎えた小学校は日本中に数多あれども、地域、保護者、学校が一丸となって花火大会を成功させた例は非常に稀であると思います。皆様で祝い上げていただきありがたく思いますし、誇らしく、心強くもあります。あらためて地域に支えられている学校であることを強く感じました。



50年前に編纂された「赤江教育百年誌」の中に、長きにわたり赤江教育を支え発展させたものとして三つのことがあげられています。第一は、「一生懸命勉学に励む子どもと向学心。」第二は、「子どもの成長を願う親心とその集団。」第三は、「赤江小学校を『うちの学校』と呼び教育環境整備に努力された地区民の郷土愛」です。この三つは、「一生けん命学ぶ子ども」「子どものためにと熱心で協力的なPTA」「応援してくださる地域の皆様」として脈々と受け継がれ、歴史ある赤江小教育が発展してきました。赤江小学校の財産であると思っています。これからも赤江小学校をご支援くださいますようお願い申し上げます。

ホームページの紹介



赤江小学校のホームページで、本校の様々な開校150年記念事業の取組を紹介しています。下記の記念コラムも掲載しています。ぜひご覧ください。

〔記念コラムの例〕

QRコードをご利用ください→

「悲願の学校統合」「校歌の制定」「懐かしの木造校舎」「白鳥小学校との児童交流の始まり」「三つの言葉」「赤江小150年の歴史を振りかえる」「学校の沿革」「歴代の校長先生」「赤江教育後援会の誕生」「太平洋戦争中の赤江小の様子」「本土決戦～戦時中の暮らし～」「みなさんの赤江小学校の思い出」「体育館の絵」「尋常小学校と高等小学校」「熱心な教育研究の取組」「学校プール設置」ほか。

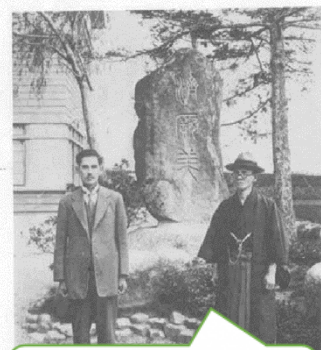


記念コラムより～「悲願の学校統合」

「赤江教育百年誌」に、「幕末にはかなりの寺子屋があった。市誌によると、赤江は安来と並んで十四の寺子屋が数えられる。・・・赤江にはかなりの寺子屋があり、多くの子どもたちが勉学に励んだことは事実であろう。」とあります。教育熱心な土地柄であったことがうかがえます。

明治6年5月23日に法雲寺本堂に東赤江、西赤江、上坂田、中津の四村連合の小学校が開設されました。当時は、他にも小学校が点在し、しばらくは別々に教育が行われていました。明治22年に赤江村が誕生しますが、学校の変遷もそれに軌を一にして小さい小学校が次第に統合され、やがて、東赤江、今津の2校で地域に即した着実な教育実践が進められていたようです。

そして、昭和6年、「悲願の統合」となる赤江村尋常小学校校舎が現在地に建てられ、ついに一村一校となりました。「17名の教員と600名を超す生徒で新しい校舎への移転を完了したのは、昭和6年11月9日」と記録にあります。この時に建てられた木造校舎は、「赤江村国民学校」「赤江村立赤江小学校」「安来市立赤江小学校」と名称を変えながら、現在の鉄筋の校舎が落成した昭和52年まで半世紀にわたり学び舎として使用されました。



統合記念碑（今もあかえっ子クラブ前に建っています）

開校150周年に寄せて

前校長の客野智先生、前々校長の足立智美先生に寄稿していただきました。

赤江小学校の150年をみますと、前半の3分の1は、「統合前で別々の校舎で学んでいた時代」、中盤の3分の1は、「統合されて現在の場所に建てられた木造校舎で学んでいた時代」、後半の3分の1は、「児童交流」と「鉄筋造りの現校舎で学んでいる時代」に大きく分けられるように感じます。お二人とも本校の特色ある教育活動である「児童交流」について思い出を書いてくださいました。



（姉妹校縁組の時の様子）

足立 智美 先生（平成28年度・29年度校長）に寄せていただいた言葉

私は母校で迎えた教職最後の2年間、50年続く児童交流を身をもって体験させていただきました。バスから降りてくる白鳥小学校を迎える全校児童の興奮と瞳の輝き、夜のイベントで弾ける笑顔、涙で見送る純真な姿…参加した誰もの生涯の思い出でしょう。PTAと地域が一体となって重ねてこられたスケールの大きなこの活動は、「進取の心」と「相互扶助」の赤江の風土が生み育てたものであると敬服しております。過日、開校百年事業の「赤江教育百年誌」の卒業生欄に拙い自分の作文を見つけ赤面しました。と同時に、いかに歳を重ねても、赤江を離れ遠隔の地にあってもふるさと赤江への思慕と感謝の念は終生変わらないとの思いを深めました。



客野 智 先生（平成30年度～令和2年度校長）に寄せていただいた言葉

年末大掃除の最中、懐かしい写真を目にした。そこには、だんじりに乗り笑っている私が出た。写真から、白鳥小での一場面が思い出された。それは、初めて両校児童（ペア）が顔を合わせた時のことである。不安と期待が入り混じった表情。途切れ途切りの言葉で相手を探る。次第に会話が弾む。そして、1泊2日のペア活動を通して満面の笑顔へと変わっていく。何とも微笑ましい光景である。しかし、関係づくりが上手くいかず戸惑うペアもいた。私は、児童交流が辛い経験として残ることを心配していた。



そんなペアを見ながら、児童交流に託された思いを問い返す。「赤江の子は、井の中の蛙であってはならない」というPTAの切なる願いから本交流事業は生まれたのである。換言すれば、「何事にも臆せず挑戦し、その経験を生きる力に変えるたくましい人となれ!」である。そう考えると、良好なペアの関係を望むなら、自ら行動を起こさなければ何も生まれないことに気づく。辛く苦い経験は無駄ではない。人はとかく都合の悪いことや辛いことを避けて通りたがる。



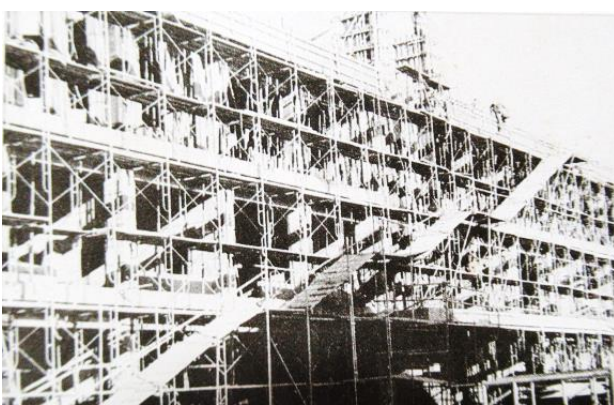
しかし、実はそうした辛い経験(場面)を乗り越えることで、人間は一回りも二回りも大きく成長できるのである。

児童交流が始まって半世紀になる。残念ながら、コロナの流行で両校の行き来はなくなったが、今はリモート形式による児童の交流に変わりつつある。今後、どのような児童交流の歴史が刻まれていくのか楽しみにしていきたい。

思い出ギャラリー



昭和6年に完成し、昭和51年度まで使用した懐かしい木造校舎です。多くの子どもが学び巣立っていきました。



開校百年記念祝賀会で校舎改築の声が上がり、昭和52年に完成した現在の校舎。完成時の喜びが伝わってきます。



地域の熱意によって整備されたプール。交流センター側にありました。現在のプールは、昭和61年8月に完成しました。



旧体育館と建設中の現在の体育館。体育館は、昭和 62 年に竣工しました。



150 年を記念して体育館ステージ幕を整備しました。

上空より撮影し、クリアファイルに印刷して配布しました。

記念事業として「見守り隊のベストの整備」「記念キャラクター、ポスター制作」「記念コーナー設置」「ホームページに記念ページ掲載」「文化祭に記念展示」「記念式典」「花火大会」「10 年後の自分への手紙」などに取組みました。

開校 200 年に向けて「其の根を培う」

今の小学生が還暦近くになる頃、赤江小は開校 200 年を迎えます。

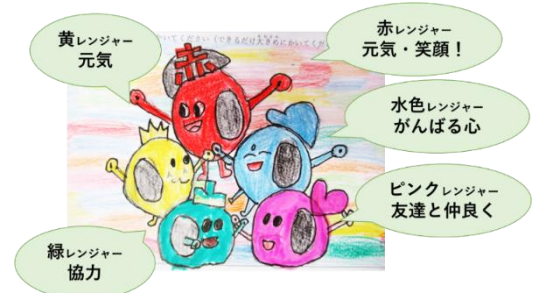
激しく変化し予測不能と言われる現代社会。50 年後はどのようなになっているのでしょうか。きっと大きく変わっていることと思います。

赤江小学校の玄関には、「其の根を培う」と書かれた額が掲げられて

います。この額は、今からおよそ 140 年前の明治 14 年に、当時の 堀 実 校長先生がお書きになったものです。校舎が変わってもこの額は掲げられ続け、今の校舎が完成した際、木造校舎の玄関から移されました。この言葉には、「赤江に育つ子どもたちに、自分の根となるところをしっかりと培い、強くたくましく生きてほしい」という願望が込められていると思っています。

根をしっかりと培えば、どのように社会が変化しようとも自らの力を発揮することができます。赤江小学校の永遠の校是として伝えられているこの言葉は、明治、大正、昭和、平成、令和へと時代が移ろっても変わらぬ光を放ち続けています。これからも大事にしていきたい言葉です。

この先も赤江の子どもたちが自らの根をしっかりと培い、思う存分、社会で活躍することを、そして、赤江小学校が地域とともにあり続け、開校 200 年を迎えることを願っています。



記念キャラクター「タイヤ山レンジャー」